

【テーマ①】 ▶ **学びに対する無関心層にどう働きかけるか**

- ★子育て家庭を孤立させないためにも、様々な体験に興味がない家庭に、どうやって関心を持たせるかが大事
- ★高齢者の孤立を防ぎ、生きがいにつなげるためにも、いろんな情報をタイムリーに届けることが重要
- ★学びに無関心な人に興味を持たせるのは難しいが、どのようなアプローチをすれば効果があると考えられるか
- ★新しい施設を作ることは難しいが、今ある資源を活かして、どのようなことができるか

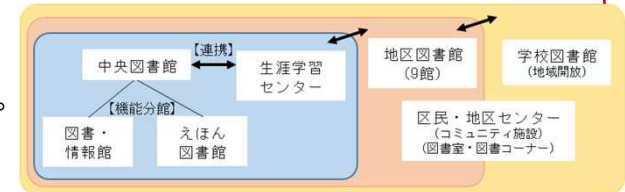
市内の学習拠点  
都心  
地域

○札幌市図書・情報館

- ・「札幌市図書・情報館」「札幌文化芸術劇場 (hitaru)」「札幌文化芸術交流センター (SCARTS)」の3施設からなる複合施設「市民交流プラザ」にある図書施設。
- ・再開発事業により2018年に開館。
- ・劇場と文化芸術交流センターは、(公財)札幌市芸術文化財団を指定管理者とし、図書・情報館は市直営。
- ・民間企業が入居するビルと一体となっており、都心部における新たな交流の場として、活用されている。
- ・「図書・情報館」は貸出をしない「課題解決型図書館」の取組みが評価され、2019年Library of the Yearを受賞している。

○札幌における生涯学習環境 (施設)

- ・各区には区民センターがあり、サークル活動や区民講座の場となっている。
- ・区民センターのほかに地区センターがあり、身近な地域活動の場となっている。
- ・区民センターや地区センターには図書館の機能もある。
- ・各区に地区図書館があり、学びを深める場となっている。
- ・さらに地域では、学校図書館地域開放事業も実施している。
- ・全市的な生涯学習の中核施設として「生涯学習センター」と「中央図書館」がある。



【テーマ②】 ▶ **学びをボランティア活動やまちづくり活動につなげるには何が必要か**

- ★「学び」は個人的なものであるが、学んだことはやってみたくなるはず
- ★学んだ成果を実践 (行動) に結びつけることで、生きがいや人生の楽しみにつながる
- ★実践 (行動) した結果が誰かのためになれば、それがやりがいになり、その輪が広がれば「まちの活性化」につながる
- ★学んだことを自らの意思で実際の行動に移してもらう (ボランティア活動) ためには、どのような工夫 (仕掛け) が有効か

※「ボランティア」とは…

- ・意味は「自分の意思で自ら進んでやること」で、自発的な意思で人や社会に貢献すること
- ・定義は「仕事、学業とは別に地域や社会のために時間や労力、知識、技能などを提供する活動」
- ・ボランティアの4原則
  - 【自発性・自主性】 = 自ら進んで行動する
  - 【無償性・互酬性】 = 見返りは求めない
  - 【社会性・連帯性】 = 互いに助け合いながら行動する
  - 【先駆性・創造性】 = 仕組みや枠組みにとらわれず、何が必要か考えて実施する

【学びのきっかけを作る施設の取組み】

札幌市図書・情報館

- ◆「札幌市図書・情報館」は、調査相談・情報提供に特化した「課題解決型図書館」として、札幌市民交流プラザ内にオープン。
- ◆「WORK」「LIFE」「ART」の三つのエリアに分け、分野ごとに専門的な図書や新聞、雑誌を豊富に用意し、貸出を一切行わず、リサーチに特化している。
- ◆約200の座席のうち一部は予約可能。また、一部の席は飲み物の持込みや会話も可能としている。
- ◆三つのテーマに応じたセミナーやトークイベントを頻繁に開催している。
- ◆起業、経営、法律などの専門機関による相談窓口を定期的に開設。
- ◆ミーティングルームやグループ席もあり、事前予約すれば、打ち合わせをしながら調べものが可能。
- ◆Wi-Fiやコンセントも完備しており、パソコンの持込みが可能。
- ◆カフェが併設されており、行き来が可能。カフェに図書を持ち込むこともできる。
- ◆地下歩道と直結しており、多くの人が行き交う複合施設の利点も活かし、仕事や暮らしの新たなヒントが見つかる場として機能している。

大和市文化創造拠点「シリウス」

- ◆大和市の「シリウス」は、4つの機能を持つ複合施設を一体のものとして融合・連携を図るため、全体を一括して一つの指定管理者の運営としている。
- ◆施設全体を一つの図書館空間とみなし、誰もが居場所を見つけられるようにした運営が特徴。
- ◆カフェが出店しており、購入したコーヒーや持ち込んだ飲み物を飲みながら、館内のどこでも図書館の本が読める。
- ◆有料（2時間100円）の座席「市民交流ラウンジ」もあり、窓際にはコンセント付きのカウンター席が並び、読書テラスもある。
- ◆大和市は、図書館を中心としたまちづくりに取り組んでおり、複合施設であっても施設全体を図書館と捉え、市民の居場所としようという発想が生まれた。
- ◆館内での飲み物、会話、写真撮影など特に細かなルールを決めていない。こうした柔軟な運営は指定管理者からの提案で実現していることが多く、指定管理者は、複合施設それぞれの機能を専門とする企業の集合体でありその連携した取組みが、新たな市民の学びの場を生み出している。

【学びを実践につなぐ他都市の事例】

神戸市「シルバーカレッジ」

- ◆神戸市シルバーカレッジは、豊かな経験を活かして自らの可能性を拓き、その成果を社会に還元することを目指した高齢者のための生涯学習機関として、平成5年9月に開校。
- ◆カレッジのモットーは「再び学んで他のために」。
- ◆対象者は、57歳以上で、アドミッションポリシーとして学習やボランティア活動、地域活動など社会貢献活動の実践に理解と興味のある人としている。
- ◆「健康福祉/健康ライフ」「国際交流・協力」「生活環境」「総合芸術」の4コースで、各コース3年間の体系的な学習が用意されている。
- ◆定員は、総合芸術コースのみ140名で、他3コースは100名。
- ◆授業は、週2日で年間60日。
- ◆すべての在学生在が、小学校区を基本とした地域ごとにグループを作り、地域支援活動に取り組んでおり、卒業後も継続している。
- ◆卒業生でNPO法人社会貢献センター「わ」を結成しており、希望する人は専門を生かした本格的な活動も可能。
- ◆活動延べ人数は、毎年4万人程度おり、神戸市では1億円以上の経済効果に相当すると試算している。

大阪市「いちょうカレッジ」

- ◆大阪市のいちょうカレッジは、生涯学習を通じてまちづくり等を担う人材を育成する総合的・体系的な学習機会として開催している市民大学。
- ◆実施は、大阪市立総合生涯学習センター。
- ◆きっかけづくりの「入門科」、じっくり学ぶ「本科」、実践的な「専科」を用意しており、多彩なコースで興味関心に応じて学べる。
- ◆受講料は基本無料で、グループワークを基本とし、実際に街に出て活動するプログラムもある。
- ◆いずれのコースもグループワークを基本とした「学びあい」を大事にしており、講師と受講者、受講者同士がお互いに刺激を受けながら、地域課題に目を向け、具体的なアプローチを事例を通して学んでいる。
- ◆各コースとも5回程度の連続講座が中心だが、本科では15回の講座を半年かけて学ぶ長期講座もあり、まさに具体的かつ実践的に学べる講座も用意している。
- ◆まちの文化や魅力発見、まちづくりの種まき、防災、こどもと地域社会などまちづくり活動に直結するテーマを体系化している。
- ◆受講後アンケートでは、学んだことを活かしてボランティア活動等に関わりたいという人が83%となっている。

(論 点)

📍キーワード①【つながりを生む学び】

◎都市化が進み個人や家庭が孤立しがちな中、  
新たな「つながり」を生み出すには、どのような工夫が必要か

- ▶子育て家庭を孤立させない学びの工夫
- ▶高齢者などを孤立させない学びの工夫

- ◆子育て家庭や高齢者を孤立させないため、セーフティネットの意味でも、デジタルデバ  
イド対策は重要。メリットを実感してもらうような取組みが必要。
- ◆情報提供する側はデジタル化が進んでも、受け取る側がついていけない。特に高齢者は。
- ◆学校では一気に進んだが、これからの時代デジタルは結果的に子どもにとって自己実現  
の手段。家庭の格差もあり、大人への学びが必要。
- ◆町内会でもデジタル化が進んでいる。ハードはどんどん進化するが、まず興味をもつこ  
とが大事。そのためにもうまくきっかけを作ること。(孫とSNSでやり取りできるなど)
- ◆エストニアといった電子立国では、使えないと生活できないため、みんな使いこなして  
いる。慣れが大事。
- ◆子育て家庭に対しては、子育てサロンをもっと活かさないか。
- ◆デジタル一辺倒でも良くない。ハイブリッドが良い。
- ◆工夫という意味では、託児付き学習会という取組がある。また、失敗をリソースにして、  
「できない」を共有すると孤立しない。
- ◆人生の各ステージをつなぐような仕掛け=学び合いの機会があると良い。

📍キーワード②【学びから実践へ】

◎学んだ成果を活かして、  
地域での実践につなげるにはどのような工夫が必要か

- ▶個人の学びを実践につなげる工夫
- ▶ボランティア活動やまちづくり活動につながる学びの工夫
- ▶地域において子どもの学びや活動を支える  
人材を育成する工夫
- ▶学びを実践する場を提供する工夫

- ◆生涯学習の目的は個人の中にあるもので、成果をまちづくりに結び付けることに違和感  
がある。結果に過ぎないのでは。
- ◆学びから実践へという視点はあり得る。行政側の視点としては、学んだことを活かして  
もらうことは大事。
- ◆ボランティアの基本をわかって地域づくりに関わっているかどうかが大事。ボランテ  
ィアとは何か、またどこに行ったら何ができるか、そういったことをつなぐコーディネ  
ーターが必要。
- ◆実践の場という意味では、地域施設の名前が変わってきている。神奈川県大和市のシリ  
ウスのように、気付きがある情報提供の場があると良い。
- ◆学ぶ意欲は学ぶ楽しさを知ること。生きがいになる。楽しいことが増えれば、それが行  
動につながり、人の役に立つ、まちの活性化につながるのではないか。

📍キーワード③【学びの工夫】

◎人生のそれぞれの時期における学びに  
どのような工夫が必要か

- ▶幼少期に学びの楽しさを知る工夫
- ▶成人期に人生の節目に対応した学びの工夫
- ▶高齢期に新たな興味関心や  
時代の変化に対応した学びの工夫

- ◆児童会館は子育てについて発信する場として有効。また、今の子どもには遊び場がない  
ので、プレーパークを学生の企画でやってみるなど若い力を借りるのも良いのでは。
- ◆学びを身近に感じない人は、うまくやらなければと思っているのでは。ダメとわかるこ  
とも学び。失敗を歓迎するような発想が大事。
- ◆札幌の図書情報館も工夫が多い施設で人気がある。いろんな仕掛けがあると行きやすく、  
また施設の機能も活きる。
- ◆場という意味では、地域での学校の活用も大事ではないか。
- ◆札幌だと「ちえりあ」が中核施設だが、もっと便利などころに、通いやすい場ができ  
ると良いのでは。
- ◆地方の公民館では、行ってみようやってみようという体験事業をやっていた。
- ◆きっかけづくりの意味では、講座などは「ちえりあ」だけでなく、区民センターなど  
でもやっているものがあるが、身近な学びの場を総合的に検索できると良い。